

1月13日

主教ヒラリー

Hilarius Pictaviensis

(315頃～367)

～西方のアタナシオス～



ボワティエの
ヒラリウス

14Cに描かれた、ヒラリウスが叙任される場面

人名辞典などには、ボワティエのヒラリウスと表記されている。ヒラリーはキリストが神であることを否定したアリウス派の神学者たちと闘った。ガリア(現フランス)にあるボワティエの司教であり、西方のアタナシオスと呼ばれる。

彼はガリアでその生を受けたが、貴族であった両親はキリスト教徒ではなかった。ヒラリーは真理を追究しながら哲学と修辞学を学んでいき、また結婚生活も送っていた。しかし、ある時聖書に出会い、聖書を研究する中で回心しキリスト教徒となる。そして司教へと選ばれていく。

その頃、キリスト教では教理論争が激しくなり、キリストの神性を否定するアリウス派とアタナシオスらが対立していた。そして355年のミラノ会議において、アリウス派を支持していたローマ皇帝コンスタンティウス2世は、アタナシオスの追放令を出す。ヒラリーはこの命令に反抗するのだが、その行為が反逆罪とされ、小アジア(現トルコ)へと追放されてしまう。

ヒラリーが小アジアに追放されたのは356年で、そのころの小アジアはアリウス派の考え方が浸透している地域だった。しかし彼はこの期間を最大限に利用する。ギリシア語を、そして東方神学を学んでいった。またアリウス論争の分析をし、その

批判や見解をまとめていく。そしてその成果をヒラリーは出していく。小アジアの人々にアリウス派の説く説の不合理性を徹底的に批判する。これにはだれも歯が立たなかった。その結果、小アジアの人々はヒラリーを早くガリアに戻すように皇帝に要請する。

結果、ヒラリーは360年にガリアに戻り、その後もアウクセンティウスなどのアリウス派の人たちと論争をし、生涯にわたって正統教会の擁護を行う。

その著作には、反アリウス主義の文書である「De Trinitate」や「De Synodis」、またマタイ福音書や詩篇の聖書注解など多数のものがあり、1851年、教皇ピウス9世により教会博士の称号を得る。(Y)

<特禱>

信ずる者の光、魂の牧者である全能の神よ、あなたは、その言葉によってあなたの羊を養い、その模範によって彼らを導くために、しもべ、主教ヒラリーを公会の主教に召されました。どうかわたしたちに恵みを与え、信仰を守り、その生涯に従うことができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン